

第4学年 国語科の実践

1 単元名 場面をくらべて読もう「一つの花」(今西 裕行作)

2 単元目標

○物語の情景や登場人物の心情について、文章や言葉の表現をもとに想像しながら深く読むことができる。
(読むこと)

○物語の構造や人物の心情について主体的に読み取り、主題に迫りながら自分の考えを深めることができる。
(関心・意欲・態度)

3 ひびき合う子どもたちをめざすための指導の工夫

研究課題「切実な問題意識を持ち、友だちと関わり合いながら学習する子どもの育成」
手立て・・・子どもの「切実な問題」を見とった授業づくり

<単元と指導>

①単元について

「一つの花」は、一貫して話者の外の目で語られている。戦争における父親と幼い娘の悲しい別れ、そして家族の絆と愛情が描かれている。対比的な表現、比喩表現、文末表現が用いられていて、話者の思いを強調している。文章や言葉の表現から「一つの花」に込められた強いメッセージ性が感じ取れる。戦争でさえも奪い取ることのできない人の心の強さ、美しいと感じる人間らしさを、かけがえのない「一つ」として表現していると考えられる。

この物語の最大の山場(クライマックス)は、お父さんがゆみ子に「一つの花」を渡すところである。お父さんは、「一つの花」をゆみ子に渡してにっこり笑い、何も言わずに汽車に乗って行ってしまった。その描写は戦争という状況下であることや、導入部分でのゆみ子への不安とは対比している。この作品で大きく気持ちを変容させたのはお父さんである。「一つの花」の主題にせまるためには、お父さんの心情を読み取ることがとても大切である。

しかし、子どもたちはゆみ子の視点になって、「一つの花」を読むだろう。「一つだけ、、、」を繰り返すゆみ子、父親のいないゆみ子、「どうして同じ言葉ばかり言うのか」「かわいそうだ」という思考が予想される。その流れに沿って、「ゆみ子が自分だったら」「お父さんが自分のお父さんだったら」と作品の登場人物を自分や自分の親に置き換えて考える学習を取り入れたい。「自分の親は、自分をどう思っているのか」というのは、まだ9歳、10歳の児童にとっては切実な問題となる。「親は我が子にどのような思いを抱いているのか」という父親の視点に近づくと、「ゆみ子のお父さんはどうして何も言わずに行ってしまったのか」といったお父さんの描写に疑問をもつだろう。ここで、お父さんの心情を知りたいという知的好奇心を持たせたい。そして父親の視点に立つことで、人物の心情を表す言葉や表現があることに気づき、そのおもしろさや巧みさ、読み取る楽しさを味わうこともできるだろう。また、作品に出てくる様々な表現に対して、一人一人違った捉え方や違った考えをもつことを楽しいと感じてほしい。学習の主体が子どもたち自身であることを常に実感できるように授業を心がけたい。

②他教科との連携について

「一つの花」の背景は、戦争時代である。目標にある「深く読む」を追究するためには、時代背景を表す言葉の意味を理解し、そのイメージを自分なりにもっている必要があると考えた。戦時中の生活の様子を祖父母の体験談や資料から「戦争」を感じ取る。調べ学習を通して当時のイメージをもつことで、一人一人の「読み」の助けになると考えられる。また、道徳の時間では、「おかあさんのせいきゅう書」を読んで、子どもへの親の思いを考える学習を行う。そして、親が思う子どもへの気持ちや愛情を考えておきたい。

③子どもの見とりと学習過程について

本単元に入る前の学習の様子から考えると、児童は「一つの花」を読んでも主題に迫るほどの深い読みは難しい。また、「一つの花」が戦争時代であったり父親の思いが大きく関係していたりと児童にとっては捉えにくいだろう。他教科との連携を図りながらも、読み取りの学習を丁寧に行っていきたい。

大半の子どもたちはゆみ子が主人公であると思うだろう。そして、ゆみ子に視点を当てて読むことで「お父さんは死んでしまったのか」という疑問をもつ。そこは読み手に委ねられているように描かれているが、子どもたちは執着しやすい。視点を換えられるために、自分は親からどんな思いで育てられているのか考えたり親に手紙を書いてももらったりといった活動を取り入れる。自分の親の思いを知ったとき、「ゆみ子のお父さんは、ゆみ子のことをどう思っていたのか」という視点をもつことができると考えられる。そして、クライマックスでは、「どんな思いでお父さんはゆみ子に一つの花（コスモスの花）を渡したのだろうか」という疑問にたどり着くと考えた。その疑問が切実な問題として意識されたとき、一人一人の読みが深まりお互いの意見を交流する中で主題に迫ることができると思う。

④本時のねらいとひびき合いについて

ゆみ子の視点に立つと、「一つの花」のクライマックスは十年後の場面と考える児童が出てくるだろう。それに反して、お父さんとの別れの場面がクライマックスという児童も考えられる。お父さんとの別れの場面でも、「一つの花」を渡している瞬間なのか、渡したあとのお父さんが去っていくところなのか意見が分かれると思う。本時では、物語の構造を把握するためにクライマックスがどこかを話し合う。いくつか出させた後で、2つの意見に絞って話し合わせたい。ゆみ子の十年後、もしくはお父さんとの別れる場面のいずれかである。この2つに絞ることで、討論のための討論にすることなく、自分の立場をはっきりさせて話し合いに参加することができると思った。そして、物語の主題を読み取ろうとしたとき、あとがきであるゆみ子の十年後がクライマックスではないこと、また、主題はお父さんとの別れの場面に隠されていることを物語の構造から理解してほしいという願いがある。本時のまとめでは、「主人公はゆみ子でも、どうやらお父さんの心情を読み取ることが大事なようだ」と理解できるようにしたい。そして、そのためにはお父さんの描写を丁寧に読み、文章や言葉の表現から想像していく学習が必要であることを、子どもたち自身で感じ取れるようにしていきたい。本時の学習が読み取りの手立てとなり、登場人物の心情や物語の主題にせまろうと深く読む起点となる。

個人によってどの文章・言葉の表現を取り上げるかは違ってくる。また、同じでも根拠とした理由が違ってくる。その違いを楽しく捉え、さらに自分の考えを伝えたり友だちの考えを取り入れたりするところを「ひびき合い」としたい。そのために、クライマックスまでの学習において様々な言葉、表現を抜き取ってグループで話し合う場や学級全体で取り上げて考える時間を多く設定する。学習のしかたが分かっていく中で、児童は「一つの花」の意味について、その言葉の裏を考えようとする思考の流れをたどる。主題にせまるときには、一人一人が考えを持ち、それを伝え合うことで学習を深めていく。

4 単元指導計画（全12時間）

	学習活動	主な支援・留意点【評価】
1 4	○教材に興味を持ち、学習の見通しを持つことができる。 お話をていねいに読んで学習を進めよう ・「一つだけちょうだい」という出だしから、どんな物語が想像する。 ・教師による範読を聞き、感想を書く ・新出漢字や難語句の確認 ・音読練習 ・文章表現について、その言葉や意味を知る。 (比喩表現、対比、反復、文末表現等)	・音読については、毎時間、全文を通読できるように時間を保証する。 ・難語句は、朝の学習などに行っておく。 発表の際には辞書通りではなく、子どもたち自身の言葉で表現し、動作化を試みる。 【関心・意欲・態度】
5 6	○物語の構造を把握する。 深く読めるように、お話の流れを考えよう ・時、場、人物を明らかにする。 ・発端の場面を見つける。 ・クライマックスの場面を明らかにする。 ・作品全体の構造を理解する。	・話し合いでは、なるべく2つに絞って児童がわかりやすく議論できるように進める。 ・次の読み取りのために、曖昧にせず結論を出していく。暫定的にしたものは学習を進めながら明らかにしていく。 【関心・意欲・態度】【読む】
7 10	○登場人物の心情の変容を心内語や情景描写から読み取る ゆみ子のお父さんは、ゆみ子にどんな思いを抱いていたのだろうか（なぜ、花だったのか） ・導入部 「時・場・人物」について ・展開部 「お父さん」の心情について ・山場の部「一つの花」について ・終結部 「コスモス」について	・戦争当時と現代との対比、見送りの場面での対比の表現に着目することで人物の心情や様子をつかませる。 ・「まるで、～のように」という比喩表現から、さまざまな想像をして自分の言葉で表現する。 【関心・意欲・態度】【読む】
11 12	○作品に対する思いを文章にまとめる。 お話を深く読んで、思っていることを書いてみよう ・思っていることを書く。 ＜書かれ方の優れたところ＞ ＜登場人物の生き方について＞ ・書いたことを班ごと発表する。	・学習したことを想起して自分の言葉で書く。 ・班やクラスに発表する。 【関心・意欲・態度】

7 本時について

(1) 本時目標（5／12）

物語全体の構造を考えながら、話がもっとも大きく転換する文を、根拠となる表現を読み取りながら考え、クライマックスについて話し合うことができる。

(2) 本時展開

学習活動	指導上の支援・留意点・評価
1. 前時までの学習をふりかえる。 ・「いちりん」を漢字で書いてみましょう。 ・小田原の空襲について調べた人がいたね。誰だったかな？	・前時までの学習で学んだことや活動を想起できるよう発問する。 【関心・意欲・態度】

2. 学習課題について確認する。 クライマックスを見つけましょう。 ①クライマックスと思う行の上に②のマークをつける。 ②クライマックスをどこにするのか班で話し合う。 ③どこをクライマックスにしたか発表する。 ④自分の選択した文と同じところに名前マグネットを貼る。 ・「ゆみ。さあ、一つだけあげよう。～大事にするんだようー。」 ・ゆみ子は、お父さんに花をもらおうと～喜びました。 ・お父さんは、それを見てにっこり笑うと、～見つめながらー。 ・でも、今、ゆみ子のとんとんぶきの～包まれています。 ・今日は日曜日、ゆみ子が小さなお母さん～お昼を作る日です。 ⑤自分の考え、理由をノートに書く。 （書き方：自分の意見が正しい理由、他の意見が違う理由） ⑥班で話し合う。 ⑦2つに絞って討論し、クライマックスがどこなのか読み取る。	・じっくり声に出して読むことを伝える。 ・4人グループで、全員話せるように、リーダーが司会をして話し合いをスムーズにするよう助言する。 ・自分の立ち場をはっきりさせることで、一人一人が真剣に考えるように促す。 ・出された文が多数ある場合は、早めに2つに絞る。 【読む】				
<table border="1" style="width: 100%; border-collapse: collapse;"> <tr> <th style="width: 50%; padding: 5px;">お父さんとの別れ</th><th style="width: 50%; padding: 5px;">十年後のゆみ子</th></tr> <tr> <td style="padding: 5px;"> ・「一つの花」が渡されるところだから。 ・ゆみ子がとても喜んだから。 ・たくさんの表現からお父さんの気持ちがわかるから。 </td><td style="padding: 5px;"> ・コスモスの花でいっぱいになっているから。 ・ゆみ子が幸せに暮らしているから。 ・ゆみ子の成長がわかるから。 </td></tr> </table>	お父さんとの別れ	十年後のゆみ子	・「一つの花」が渡されるところだから。 ・ゆみ子がとても喜んだから。 ・たくさんの表現からお父さんの気持ちがわかるから。	・コスモスの花でいっぱいになっているから。 ・ゆみ子が幸せに暮らしているから。 ・ゆみ子の成長がわかるから。	
お父さんとの別れ	十年後のゆみ子				
・「一つの花」が渡されるところだから。 ・ゆみ子がとても喜んだから。 ・たくさんの表現からお父さんの気持ちがわかるから。	・コスモスの花でいっぱいになっているから。 ・ゆみ子が幸せに暮らしているから。 ・ゆみ子の成長がわかるから。				
3. 今日の学習をふりかえる。 ○今日の学習について感想をノートに書き、発表する。	・自分の思いを自由に書いてよいことを伝える。 【関心・意欲・態度】				

(3) 本時の具体的な評価

	◎ 十分に満足できる	○ おおむね満足できる	努力を要する場合の手立て
読む	物語全体の構造を考えながら話がもっとも大きく転換する文を、根拠となる表現や父親の心情と関連づけながら読み取ることができる。	物語全体の構造を考えながら話がもっとも大きく転換する文を、根拠となる表現をもとに読み取ることができる。	父親とゆみ子の様子がわかる文章や言葉を見つけ、それを根拠に話し合いに参加できるようにする。

6 実践を終えて

(1) 単元を通して

単元に入る前に、社会「むかしの暮らし」の学習にも関連させて、事前に戦争について調べてくるように伝えた。広島や長崎の原爆の資料を持ってきた子や、実際に防空壕を見に行ってきた子など、朝の「暮らしのたしかめ」の時間に報告することがあった。「一つの花」の初発の感想でも、「お米がきちょうなんて、まずしい。」「なんでおやつどころじゃなかったの。」など、戦時下における人々の暮らしについて疑問が出ていた。地域で調べていた児童から、小田原空襲について書かれた掲示板があると報告してきたことをきっかけに、地元の方から貴重な戦争体験を聞くことができた。歴史的な背景や戦時中の社会状況について把握できたわけではないが、人々にとって過酷な状況であったことは、多少感じることはできたようだった。

初発の感想では、ゆみ子に関する感想の記述が多かった。児童の視点は主人公のゆみ子に向けられていることがわかる。また、コスモスの花について疑問をもつ子も多かった。ゆみ子の父親や母親についての感想は少なかったため、「一つの花」の主題にせまるためには親の思いについて考えられるような手だてが必要だと考えた。そこで、道徳では「お母さんのせいきゅう書」を扱い、子に対する母親の無償の愛に気づけるように話し合い活

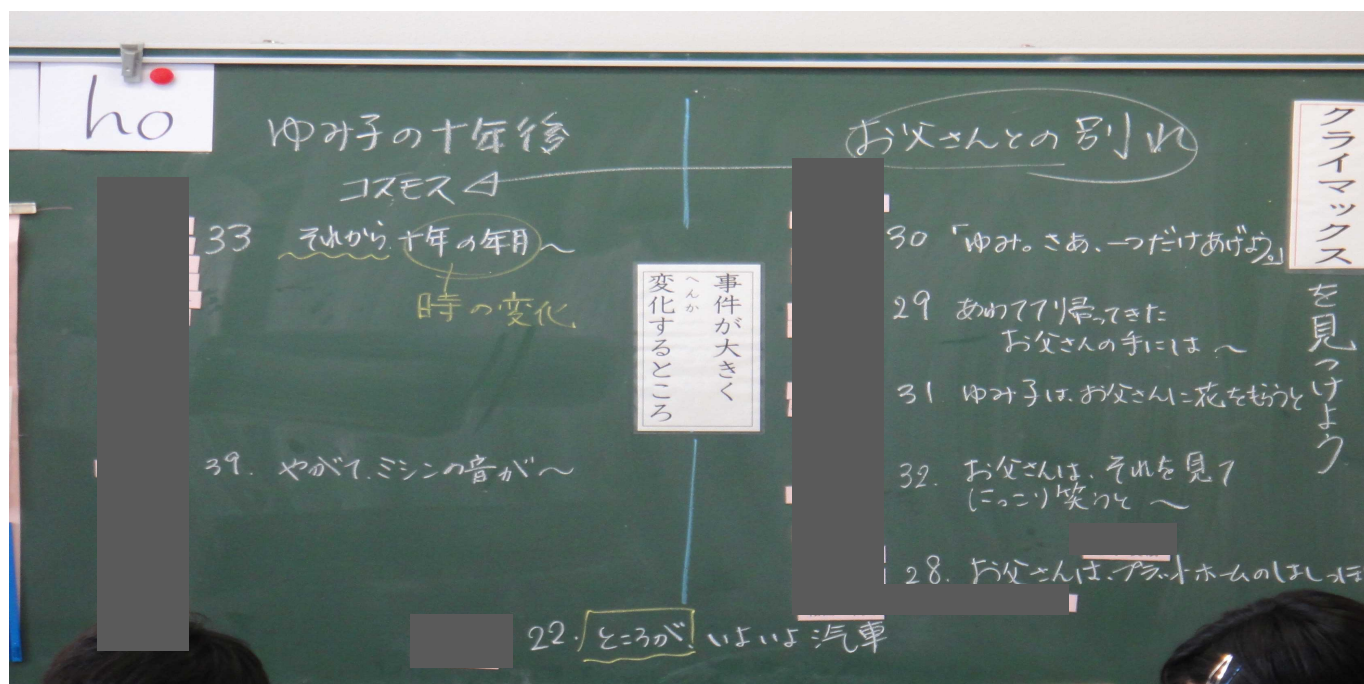
動を取り入れながら学習した。また、自分に対する親の気持ちをすることも大切だととらえ、保護者の方の協力のもと、我が子への思いを綴った手紙を書いてもらった。

クライマックスや物語が展開していく発端の文章を見つける学習を通して、読みを深めながら物語の構造を理解していくと、「なぜ、『一つの花』という題名になったのか」という疑問が生まれた。初発の感想からも、「コスモスがなんのかんけいをしているか知りたい。」など、コスモスの花に何か意味が込められていることを感じている児童がみられた。クライマックスがまだはっきりしないとき、ゆみ子とお父さんとの別れの場面にクライマックスがあるということは話し合い活動ではっきりきた。しかし、題名の由来を追究するためには、どうやらコスモスの花やそれを渡したお父さんの思いを読み取るが必要であるということになった。深く読む学習では、「なぜ、『一つの花』という題名なのか」という課題をもとに、お父さんの思いやコスモスの花に目を向けて読んでいくことになった。

(2) 本時について

「クライマックスを見つけよう」という学習課題をもとに、グループ活動や話し合い活動を行った。児童からは、大きく分けてお父さんとゆみ子の別れの場面と十年後のゆみ子の場面の文章が多かったため、クライマックスを一つの文に絞るのではなく、「どちらの場面にあるのか」という話し合いとなった。「クライマックスは、事件が大きく変化するところ」と伝えたが、児童には曖昧でわかりづらかったようだ。しかし、「十年の年月」という言葉からゆみ子の十年後はあとがきであること、お父さんとゆみ子にとっては一生の別れであることからお父さんゆみ子の別れの場面にクライマックスがあるのではないかとということになった。

クライマックスがどこなのかを一人一人が考え、始めに名前マグネットを黒板に貼った。自分の考えをはっきりさせたことで、そのあとのグループの話し合いは活発になった。クライマックスがどこにあるのかという課題は、物語の主題をどのように捉えたかということに関わってくるので、その捉え方が人によって違うというところにおもしろさがあったと思う。また、クライマックスが物語の重要なところであることはどの児童も理解していたため、児童にとっては興味を持って課題に取り組めたのではないと思う。しかし、この課題が切実な課題となったかという疑問が残る。児童と一緒に話し合っただけで決めた課題ではないため、ほぼ教師が主導で設定した課題となってしまった。児童が自ら解決したいという課題を児童と一緒に話し合うなど、主体的に学習できるような課題設定の工夫が必要であった。



(3) 成果と課題

社会背景が戦争であり、物語の主題が「家族の愛情」、「人間らしい心の強さ」であるため、4年生の児童には

難しいテーマであった。しかし、文章表現や物語の構造をヒントに父親の心情を読み取らせたいという願いがあった。文章表現では比喻や対比、文末表現とは何か、構造読みをするときには導入部から終結部までの流れやクライマックスとは何かを深く読む前におさえていたため、人物の心情を読み取るときに文章中の言葉を根拠にした考えを発表する児童が増えた。また、グループ学習を基本としたため、一人一人が自分の考えを持ちながら授業に参加することができた。「一つの花」は、泣きやまないゆみ子をあやすために渡したと答えていた児童が、「ゆみ子に幸せになってほしい」「どんなことがあっても人間らしい心をわすれないでほしい」という父親の愛情が込められているという考えに変わっていったことは、主題にせまれた読みの学習を進められたのではないかと感じている。

クライマックスを見つける学習では、根拠となる部分を発表していたのだが、選んだ文を黒板に書くだけに板書をとどめてしまった。また、討論のための討論にならないよう、なるべく意見をしぼろうとしてしまったが、消し合いのような討論となる場面が出てしまった。子ども同士の思いがもっとひびき合えるように、子どもたちの意見を必ず板書して、お互いの考えが見える形にすべきであった。また、友達の考えを受け入れながら、より自分の考えを深めたり見直したりするような学習の場をもっと大切にすべきだと思った。板書やグループ学習の持ち方、討論での一人一人の考えの捉え方など、子ども同士がひびき合えるような工夫や教師の意識がさらに必要であったと感じた。